

マルグリット・ユルスナール『青のコント』試論

—「青のコント」の中の「青」—

Conte bleu de Marguerite Yourcenar —le«bleu» dans *Conte bleu*—

博士後期課程 仏文学専攻 1991年度入学

中 村 美 緒

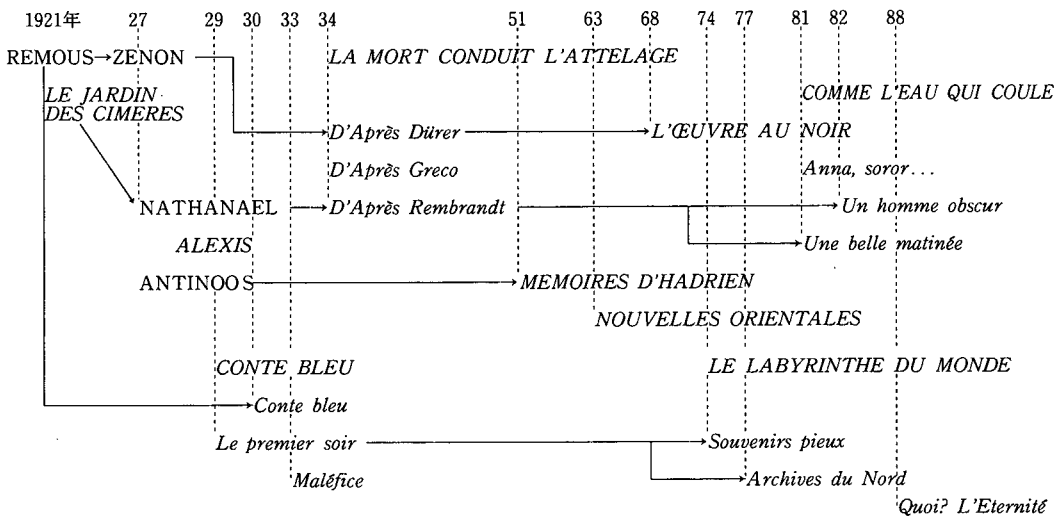
MIO NAKAMURA

序

今年の初めに¹⁾、マルグリット・ユルスナールの三つの短篇「青のコント」*Conte bleu*、「最初の夜」*Le premier soir*、「呪文」*Maléfice*が、ジョジアヌ・サヴィニョー Josyane SAVIGNEAU の22ページに及ぶ解説を付して『青のコント』*Conte bleu*, Gallimard, 1993というタイトルで出版された。これらの作品は、最新作というよりはむしろ初期の作品である。遺言によって、死後50年間はアメリカのメイン州マウント・デザート島にあるプチット・プレザンス *Petite plaisance* と名付けられた彼女の家にある資料および原稿は、一部を除いて公開されないことになっている²⁾。その中でこの作品を含めたいくつかのもののだけが出版を許された。今回初公開なのは、三篇のうち「青のコント」だけである。サヴィニョーも言っているとおり³⁾、この『青のコント』は、ユルスナール作品の様々なモチーフを含んで興味深い。彼女の作品の中には、主人公が漂流を続けたあげくに死に至るという筋書きの作品がいくつか見られるが⁴⁾、「青のコント」はそれらの原型と言える。「様々な国籍を持った商人たちがサファイアの原石のある洞窟を目指して船旅に出て、首尾よくサファイアを手に入れたが、一人また一人と手放し、最後にはたった一人ギリシャ人だけが残ったが、彼もまた何も持っていなかった」という不条理な展開を持つ。また「最初の夜」には、後の『アレクシス——あるいは空しい戦いについて』*Alexis ou le traité du vain combat*, Sans Pareil, 1929や『この世の迷宮』*Le labyrinthe du Monde* の「敬虔な想い出」*Souvenirs pieux*, Gallimard, 1974「北の古文書」*Archives du Nord*, Gallimard, 1977の原型が見え、「呪文」は『東方綺譚』*Nouvelles orientales*, Gallimard, 1963の中に含まれているいくつかの短篇を彷彿とさせる。

I. 系図

この三篇は、ユルスナールが《二十代の計画》projets de la vingtième année⁵⁾と呼ぶ、後の自伝的作品『この世の迷宮』や代表作『黒の過程』*L'Œuvre au noir*, Gallimard, 1968の母体となった、1921年から25年にかけて「渦」*Remous* という題で書きためられた膨大な量の原稿⁶⁾の一部から出発している。この「渦」は結局ほとんど廃棄されてしまうが、著者はこの後の自分の著作活動を指して、若い頃の狂気が生み出した断片を成長してから再構成することだったと言う。事実、彼女の作品は絡み合った木の枝のように発展していく。



▶イタリックスで示された作品は出版されたものであり、小文字であらわされたタイトルは、三部作の中の一つの作品のタイトルを指す。

上図に見られる様に、ユルスナールの作品は、ある作品の一部分が発展して長篇となったり、分かれて複数の作品となることがある。「渦」は、四世紀に渡るいくつかの家族の歴史の記録であったが、それが直接フランスとベルギーの家族の肖像として——つまり、de Crayencour 家と de Cartier de Marchienne 家⁷⁾の記録として——結実したのが『この世の迷宮』であり、中の三つの断片が発展したのが『死に神が馬車を導く』*La Mort conduit l'Attelage*, Bernard Grasset, 1934である⁸⁾。以前、「デューラー風に」*D'Après Dürer* から『黒の過程』への発展過程を考察した⁹⁾。この二作品の密接な関係は明らかだが、統合されているのはこの作品だけではないということが、今回のこの『青のコント』の出版により明らかになった。

先の樹木状の系統図を見てみよう。ほぼ全ての作品の出発点には「渦」がある。いくつかの詩篇と、父親の死の直後に出版された、ユルスナールが「その長所はもしかしたら極端な短さにある¹⁰⁾」

と称した『アレクシス——あるいは空しい戦いについて』が世に出たあとで、彼女は本格的に作家としての《文学的キャリア》に踏み出す。そしてかつて放棄した作品のいくつかを回収しようと試み始める。彼女のプレイヤード版に収録された年譜を見ると、同一作品が何度か絶版になった後でまた書き直されて出版されている。このため、どのテキストを原典にするかで戸惑うこともしばしばであり、非難も聞かれるが、ユルスナールは、「著者は著者なりに、判定者よりも厳しい目で自分の著作を見る理由をもっているものだ¹¹⁾」と言う。この《厳しい目》はまた、訳者である岩崎力氏によって、この著者の特徴として挙げられている。「事実、ユルスナールの文学の最大の特徴は、つねに具体的であろうとし、フラマン派の絵画のように、いかなる細部をもゆるがせにしない厳しさにある」と彼は『黒の過程』の解説の中で述べている¹²⁾。この他にも、カルミネラ・ビオンディ Carminella Biondi はその論文『深淵が泥沼だった時代、30年代初頭のマルグリット・ユルスナールの作品』*Quand l'abîme était un marécage. L'Œuvre de Marguerite Yourcenar au début des années 30*の中で、『火』*Feux*, Grasset, 1936はこの著者が袋小路から脱出するのに不可欠な作品であり、これによって泥が落ちていて泥沼は深淵に変わり、「マルグリット・ユルスナールは、《彼女の》人生設計の初期段階に於いても、作品を組み立て始める時にも、かなり堅固な基礎を見出したようだ¹³⁾」と書いている。この作家の人生や作品に対する厳しい態度は、また、ジャン・ブロット Jean Blot が「散文作品は——特に韻文作品と対比した場合——一人の人間、一つの路路に匹敵するように思われる¹⁴⁾」と言っているように、ユルスナールの自身の人生を含めた——特に死に対する¹⁵⁾——厳しい態度を物語っているようである。

まず、「渦」は大別すると二つの系列に分かれていく。それは、1)いくつかの家族の変遷を追うもの、と 2)地中海的な雰囲気を持った歴史物語である。前者の家族の肖像は、ユルスナールが両親の家系を調べているうちに発見した様々な資料に負うところが大きい。この代表としては、『この世の迷宮』が挙げられる。一方、後者の代表作は『ハドリアヌス帝の回想』*Mémoires d'Hadrien*, Plon, 1951であろう。

「作品の主人公と共に成長し続け、著者が充分成長したときに初めて彼らがその秘密を明かす¹⁶⁾」というユルスナールの言葉から、主人公と共に成長することの利点について検討したことがある¹⁷⁾。この創作姿勢は、作中人物だけではなく作品それ自体にも向けられている。そのためユルスナールの作品群はその歴史を辿りながら系統立てて分類することが可能であり、ある作品は他の作品の前身であったり、分身であるといった相関関係を見つけられることが多い。前掲の系統図はそのほんの一部分である。『青のコント』としてまとめられている三つの中で『この世の迷宮』を代表とする年代記 *chronologie* の系譜に含まれるのが¹⁸⁾、「初めての夜」であり、放浪をテーマとしている一群に「青のコント」があり——放浪は、彼女の様々な作品に見つけられるテーマであり、実際に『黒の過程』の第一部は「放浪」と題されている。この系譜には『流れる水のように』*Comme l'eau qui coule*, Gallimard, 1982の中の「無名の男」*Un homme obscur*と「美しい朝」*Une belle matinée*や、『夢の貨幣』*Denier du rêve*, Bernard Grasset, 1959がある——、『東方綺譚』の前身となる、

いわば旅行の見聞の成果が現れたエキゾチックな作品に¹⁹⁾「呪文」は含まれている。たまたま、『流れる水のように』の中の上記の作品は、『死に神が馬車を導く』*La Mort conduit l'attelage*, Bernard Grasset, 1934の中の「レンブラント風に」*D'Après Rembrandt* という題の——それ以前には「ナタナエル」Nathanael と呼ばれていた——部分が分裂して出来たものであり、一方ゼノン Zénon は「デュラー風に」*D'Après Dürer* の主人公である。こうしてみると、『青のコント』としてまとめられたこれらの作品の持つ共通点がほの見えてくる。サヴィニョーはこの共通点について核心的なことを語っていないが²⁰⁾、それは製作年代ばかりではないということが分каろう。

II. 「青のコント」

この作品の出版については、サヴィニョーの解説が克明に記しているのをそれを参照すると、ユルスナールを愛する人々は彼女が1987年に死んだ後に残した沢山の書類を子細に検討した結果、「骨董品」あるいは「資料」を発見した。これらの中には、『この世の迷宮』の第三冊目である『永遠とは何か?』*Quoi? L'Eternité*, Gallimard, 1988や、エッセー集『巡礼者として異邦人として』*En pèlerin et en étranger*, Gallimard, 1989, あるいは旅行に対する情熱を傾けた『牢獄を一周』*Le tour de la prison*, Gallimard, 1991そしてそれ以外にも、彼女自身の手で整理し注を付ける予定だった膨大な量の書簡が含まれていた²¹⁾。『青のコント』として出版された「青のコント」「初めての夜」「呪文」の三作品は、この「骨董品」の中に位置づけられる。これらは一貫性を持っているという理由により一つにまとめられたという²²⁾。

「青のコント」は、先にも書いたように多種多様な国籍を持つ商人たちが船で航海をする話である。彼らはサファイアを手に入れることによって一攫千金を狙っている。首尾よく洞窟に辿り着きサファイアを手に入れるが、死んだりだまし取られたり海賊に襲われたりして、サファイアを持って旅を続ける人数は段々に減っていく。結局本国まで帰り着いたのはギリシャの商人だけで、それも、海賊から逃れるために海に飛び込んで、何日も漂流した末のことだった。彼もまたサファイアを失ってしまったが、肩を寄せ合って暖を取った乞食女の潰れていない方の瞳が、海の色（あるいはサファイアの色＝青色）をしているのを発見する。

この作品は、先に触れたユルスナールの家で発見されたとき、作者自身の手でその表紙に「1930年頃書かれたもので、三部作の一つとして構想された」と書かれてあったという²³⁾。サヴィニョーは、他の二作品が見つかっていないことを指摘して、この作品が雑誌に発表されなかった理由はここにあるのだらうと仮説を立てている²⁴⁾。

「初めての夜」は、ユルスナールの父親ミシェル Michel について書かれた上記の『この世の迷宮』の中の、父と母についてそれぞれ書かれた「北の古文書」と「敬虔な想い出」のなかの話に酷似している。この作品は、彼女の名前で出版してはどうかと父親が持ち掛けた草稿を参照しつつ書いたものだという。新婚旅行の列車のコンパートメントの中で、目の前の初々しいこの娘が、妻という

座を得た途端に凡庸な女になってしまうだろう、と夫は冷徹に想像しつつ観察している。この結婚のために別れてきた愛人、乏しい財産、これから行く夫婦としての義務とそれについて妻が何を考えているか——あるいはそもそも考えない種族＝女であるこの妻は何かを考えているのか——といったことの上に次々と彼の思いは飛んでいく。

母フェルナンド Fernande は、彼女を生んだときの産褥熱が原因で亡くなり、ユルスナールはその後父親と共に暮らし、旅行を重ねてきた。娘の文学的適性を指摘したのも、その死によってユルスナールに作家生活に入る決心をさせたのも、このミシェルである。両親の祖先を探るという作業に没頭した結果書き溜められたのが「渦」であり、それが一度破棄された後に、彼女が生まれる前までの両親の話として結実したのが「北の古文書」と「敬虔な思い出」である。

「呪文」は、作者の経験や親族の逸話に基づいて書かれたものではない。ユルスナールは旅を好み、父親と共に何度も旅行に出掛けたが、その先々で彼らは何かしら興味を引かれることに出会い、それがユルスナールの作品のモチーフとなる。サヴィニョーが言っているように、この作品も旅先で発想され1927年に執筆された。しばしば批評家によってその凡庸さを非難され、若書きの作品の一つとして片づけられてきた。イタリア人主人公アマンド Amande にかかっている呪いを解こうとして儀式を執り行うが、かえって逆に呪いをかけてしまう、という話である。ある人々はこの作品をイタリア的、あるいは地中海的と評しているらしい。

「青のコント」の創作年は1930年、「初めての夜」は *Revue de France* 誌に1929年12月に発表され、「呪文」は *Mercure de France* 誌に1933年1月に発表された。サヴィニョーの解説によれば、これらは全て1927年から1930年の間に書かれたという²⁵⁾。この時期、ユルスナールは24才から27才で、18才で処女作『シメールの庭』*Le Jardin des Cimères*, Librairie Académique Perrin, 1921を発表し、『神々は死なず』*Les Dieux ne sont pas morts*, Ed. Sansot R. Chiberre, 1922の後、1929年に『アレクシス——あるいは空しい戦いについて』を出版している。同時にこの時期には、後の『ハドリアヌス帝の回想』となる作品「アンティノウス」*Antinoos* を書き上げ——これは1926年に Fasquelle という出版社に持ち込むが受け取ってもらえなかった——、さらに『黒の過程』*L'Œuvre au Noir*, Gallimard, 1968の主人公ゼノン Zénon の概略も書き上げている。

III. 「青のコント」の「青」

今回出版された『青のコント』に含まれる作品中、「青のコント」だけが未発表であった。さらに、この作品と組み合わせるとまとまりの作品となるはずだった「白のコント」*Conte blanc* と「赤のコント」*Conte rouge* は、ユルスナールがいつの日か書き上げることを希望していたらしいにもかかわらず、我々の手元には届かなかった。この他にも、多くの作品が恐らく手つかずになって封印されているプチット・プレザンスの書類の中に、これらの萌芽を見ることが出来るだろう。しかしながらそれは2037年までお預けである。

この作品は「青」という色を多用して書き上げられている。実際に「青い」bleuあるいは「青くなる／する」bleuir という具体的な「青」の他に、アクアマリンやトルコ石や茄子といった「青」を示す記号がたくさん嵌め込まれている。そもそも、商人が目指すサファイアの洞窟や航海する海も空も「青」である。そして「青」いサファイアを手に入れようと旅に出た商人の一行の最後の一人が辿り着くのは、乞食女の「青」い瞳なのである。

「青」を示す表現

「青」 <u>bleu</u> を使っている箇所		イメージ的に「青」を暗示している箇所
p. 9	1.2 mer <u>bleue</u>	
	3	ombre indigo
	10 menton <u>bleu</u>	
	13 veines <u>bleuâtres</u>	
10	2 nuance de <u>bleu</u> très pâle faisait penser aux cernes	
	4 inscriptions <u>bleues</u>	
	8	turquoise
	10 tapis d' un <u>bleu</u> moelleux et fané	
	13 ciel était <u>bleu</u> comme la queue écaillée d' une sirène	
	17 croupes <u>bleues</u> et rases des Centaures	
11	5	simple cabochon de lapislazuli
	14	grande salle couleur d'outremer
	22 fumées d'odeurs <u>bleues</u>	
12	6 maudit au nom du ciel <u>bleu</u>	
	22	caverne aux saphirs
	25 moignon <u>bleu</u>	
13	7 cheveux noir- <u>bleu</u>	
	11 bouche n' était qu' une meurtrissure <u>bleue</u>	
	12	robe de toile lavande
14	20 collines <u>bleues</u>	
	27	jambes…prirent la couleur des aubergines mûrs
15	5 basalte <u>bleu</u>	
	16	fragments de ciel
	17	lac très pur (他にも p.16 1.18)
	24 poumons <u>bleus</u>	
16	2	saphirs(他にも p.16 1.7 1.19/p.19 1.7 1.14 1.23/p.20 1.4 1.15)
17	6 gourdes <u>bleues</u>	
18	2	aigues-marines
	19 fumée <u>bleue</u>	
	24 jambes gangrenées…étaient <u>bleues</u>	
20	6 contact des vagues favorise leur belle couleur <u>bleue</u>	
	22 pendentif de verre <u>bleu</u>	
21	20 corps <u>bleui</u> par le froid	
22	2 bille de verre <u>bleu</u>	
	8	couleur du ciel et la teinte de la mer
	26 œil droit…était pourtant miraculeusement <u>bleu</u>	
合計24ヶ所		合計20ヶ所

この短い作品の中に非常に多くの「青」が書き込まれているのが分かる。使われている色は他には灰色や透明といった青に近い、けれどもそれよりさらに淡い色で、対照的なのは、「赤」を示す茜色の部屋にいる胸に怪我をして血を流している赤い服を着た女の描写ぐらいのものである²⁶⁾。この作品が非常に短く14ページしかないことを考え合わせると、いかに多く「青」に言及されているかが分かっていうものである。平均で1ページにはほぼ3ヶ所出てきている計算になる。

Gallimard の nuf 叢書で出たこのテキスト自体が濃い青色をしているのも興味深い。今では絶版になってしまっている『姉アンナ・・・』*Anna, soror*..., Gallimard, 1981と同じ縦長の形をしている。ちなみにこちらの方は濃い焦げ茶色で、『無名の男』は濃い赤茶色で同一されている。この「青のコント」は、他に「赤」と「白」を加えて三部作として発表されるはずであった。しかしながら他の二作品が書かれないままに、当初の予定とは異なった他の二作を加えてやはり三部作として、ユルスナールが亡くなってからすでに6年経った今年（1993年）発表されたものだ。作者が意図していたかどうか定かではないが、この三色を合わせると《トリコロール》——つまりフランスの国旗の色となる。この線で検討してみると、未完のあと二作品は、それぞれ《平等》《博愛》を表したはずであろう。この「青のコント」のテーマは、サヴィニョーの指摘通り、「金銭欲、金という罠に直面した男の信じやすさ²⁷⁾」である。最後に残った一人を除いて、命を失ったりサファイアをなくした商人たちは欲張りだったのである。最後の一人は、海賊に襲われたときに船にあったサファイアのことは諦めて海に飛び込んだので命だけは助かる。彼はその時欲から解放されたと言える。この物語の「青」は、そういった自由の象徴とも取ることができよう。

それでは、他の二作品はどのようなものになるはずだったのか。「赤」は、この「青のコント」にも少し出てくるように、《血》のイメージが強い。赤い服を着ている女が、茜色の部屋にいる。彼女は胸に大きな傷を負っているのだが、赤い服を着ているせいでそこから滲み出ている血に誰も気が付かない²⁸⁾。それに対して「白」は、ごく一般的には純潔を象徴するが、どのようなイメージで描かれる予定だったのか。

おわりに

今回は、最近刊行された三部作『青のコント』の中の「青のコント」を中心に考察してみた。短篇としても相当に短い14ページのこの作品の中に、タイトルの「青」のイメージが随所に散りばめられ、全体としても、「青」のサファイアを採りに行く船旅を共にした商人たちの《金銭欲》や、それに負けてゆく様子を前面に押し出しながら、海の「青」で始まり、女の目の「青」で終わる「青づくし」の作品である。著者ユルスナールの死後、50年間封鎖されている故人の資料の中から、幸いにして我々の目に触れるところに出てくるものの数は、そう多くはない。その中で、初出版であるこの作品は、また初期の作品であるという点からも、重要なものと思われる。今回は簡単な紹介で終わってしまったが、これからまだ他作品との親子関係を探ったり、あるいは共通点と相違点を明

確にすることによって、この作品の位置や特異性を探る方向等まだ検討の余地がたくさん残っている。今回はこれらの点を考慮しながら、もう一步細かい読みを試みたいと考えている。

【注】

★【注】の中で次の二冊のテキストについては、それぞれ下記のように略号を使用する。

- I. マルグリット・ユルスナール『青のコント』
Marguerite Yourcenar, *Conte bleu*, Gallimard, 1993はCB
 - II. ジョジアヌ・サヴィニョー『マルグリット・ユルスナール、ある人生の創造』
Josyane Savigneau, *Marguerite Yourcenar—L'invention d'une vie*, Folio, Gallimard, 1993（ただし単行本は1990）はMG
- 1) Marguerite Yourcenar, *Conte bleu*, Gallimard, le 18 février 1993
 - 2) Les papiers personnels (lettres, carnets) trouvés dans la maison à sa mort doivent être scellés pour cinquante ans. (MG, p. 22)
 - 3) Et l'écriture, en dépit de quelques scories (……), possède les caractéristiques du style que développera Yourcenar à partir de la fin des années 30 :
(CB, Préface, p. VII)
 - 4) 『とどめの一撃』*Le coup de grâce*, Gallimard, 1971あるいは、『流れる水のように』*Comme l'eau qui coule*の中の「無名の男」*Un homme obscur*, Gallimard, 1981は、本当に放浪した末に死に至るが、そのヴァリエーションとして『黒の過程』*L'Œuvre au noir*, Gallimard, 1968のように、名前を隠して故郷から姿を眩ましていた主人公が戻ってきて死に至るという例も含めると、かなりの作品がこの範疇に含まれる。
 - 5) 『ハドリアヌス帝の回想』や『黒の過程』の元となる草稿を書き溜めていた時期を指す。『目を見開いて』*Les yeux ouverts*, Centurion, 1980の中で対談者マシュー・ガレー Matthieu Galey も触れている。
——Dès ce moment-là, vous aviez tout de même conçu ce que vous appelez vos «projets de la vingtième année». (Ibid., p. 56)
また、サヴィニョーも『青のコント』の前書きの中で、Ce qu'elle désigne par «mes projets de la vingtième année» (Préface, CB, p. II)と言及している。
 - 6) Ces quelque cent pages faisaient originellement partie d'une vaste et informe ébauche de roman, *Remous*, (……) (Postface, *Anna, soror* …, Gallimard, 1981, p. 131)
 - 7) ユルスナールという名字は、本名のド・クレイヤンクール de Crayencourのアナグラムである。この二つの家は、ユルスナールの父方と母方の祖先を指す。
 - 8) Ces trois récits, unifiés, et en même temps contrastés entre eux par des titres trouvés après coup, (*D'après Dürer, D'après Greco, D'après Rembrandt*), n'étaient d'ailleurs que trois fragments isolés d'un énorme roman conçu et en partie fiévreusement composé entre 1921 et 1925, entre ma dix-huitième et ma vingt-deuxième année. (Note de l'auteur, *L'Œuvre au noir*, Gallimard, 1968. Bib. de la Pléiade, Œuvres remanées, p. 837)
 - 9) 明治大学大学院紀要第30集、『死に神が馬車を導く』から『黒の過程』まで 参照。
 - 10) (……) les hasards de la vie allaient me dicter une œuvre tout autre, dont le mérite était peut-être son extrême brièveté, Alexis. (Postface, *Anna, soror* …, Gallimard, 1981, p. 131)
 - 11) Mais l'auteur d'un livre a ses raisons d'être plus sévère que ses juges : (Note de l'auteur, *L'Œuvre au noir*, Œuvres romanesques, Gallimard, 1982, p. 838)
 - 12) マルグリット・ユルスナール、『黒の過程』, 岩崎力訳, 白水社, 1981年, p. 411
 - 13) Marguerite Yourcenar semble avoir enfin trouvé des fondements assez solides pour commencer à bâtir «sa» vie et son œuvre. (Carminella Biondi, *Quand l'abîme était un marécage. L'œuvre de Marguerite Yourcenar au début des années 30*, Ed. L'Université de Bruxelles, 1988)

- 14) L'œuvre en prose——et c'est bien ce qui l'oppose à l'œuvre poétique——paraît comparable à un homme, à une personnalité. (Jean Blot, *Marguerite Yourcenar*, Seghers, 1971 p. 9)
- 15) 『ハドリアヌス帝の回想』の最後の一行「目を見開いたまま、死の中に歩み入るよう努めよう」は、後の対談集『目を見開いて』へと開花したユルスナールの死生観を端的に表す言葉。
- 16) J'ai exprimé ailleurs ce que je pense des avantages, du moins en ce qui me concerne, de ces longs rapports d'un auteur avec un personnage choisi ou imaginé dès l'adolescence, mais qui ne nous révèle tous ses secrets qu'à partir de notre propre maturité. (Note de l'auteur, *L'Œuvre au noir*, Ibid., p. 839)
- 17) 明治大学大学院生仏語仏文学研究会発行 *L'Arche* III, 1992.6.30, 『主人公と共に成長することの利点』参照。
- 18) Le premier soir, qui, dans sa «manière sèche», n'est pas dépourvu de qualités de style et de sens du récit, présente cependant un intérêt plus directement biographique. (Préface, CB, p. VIII)
- 19) Plus encore que l'anecdote, c'est l'atmosphère de ce conte qui préfigure les *Nouvelles orientales*. (Ibid., p. VII)
- 20) Comme souvent chez les grands écrivains, ces trois bref récits font apparaître une cohérence qu'on n'avait peut-être pas soupçonnée en décidant de les rassembler. (Ibid., pp. I-II)
- 21) À sa mort, en décembre 1987, Marguerite Yourcenar laissait un inédit inachevé, le dernier volet de sa trilogie familiale, *Quoi? L'Éternité*, paru en 1988; un recueil d'essais préparé par elle (*En pèlerin et en étranger*, 1989); des fragments de ce qui aurait dû être son témoignage final sur l'une de ses passions, le voyage (*Le Tour de la prison*, 1991); enfin une masse de lettres qui demandent à être triées, choisies et annotées avant d'être publiées. (Ibid., p. II)
- 22) 20) を参照。
- 23) En tête du premier feuillet, figuraient, écrites de la main de Yourcenar, plusieurs indications: «écrit vers 1930» (……) (Ibid., p. V)
- 24) Pourquoi *Conte bleu* n'a-t-il pas été donné à une revue? (……) «le projet était aussi d'écrire un *Conte rouge* et un *conte blanc*»しかしながら次のような疑問をも挟んでいる。Marguerite Yourcenar gardait-elle le projet d'écrire un jour le *Conte blanc* et le *Conte rouge* évoqués dans sa note de 1950? (Ibid., pp. V-VI)
- 25) Tous trois ont été écrits entre 1927 et 1930. (Préface, CB, p. II)
- 26) (……) dans une salle couleur de garance, ils s'enfuirent à la vue d'une femme vêtue de rouge qui perdait tout son sang par une large blessure ouverte dans sa poitrine, mais elle ne paraissait pas s'en apercevoir, car sa robe n'en était même pas tachée. (CB, p. 12)
- 27) Récit peu surprenant, car très respectueux de schémas simples ——le désir de richesse; la crédulité des hommes face au leurre de l'argent; (CB, p. VI)
- 28) 26) を参照。